

アイデンティティ論の問題

—— E・H・エリクソンを中心に

東京大学大学院 大野 道夫

——問題の所在

・近年の青年をみつめた論文をいくつか参照してみると、そこにはモラトリアム、ドリフト（漂流）の状態、シラケのホーズ、操作的パーソナリティ、そしてスキゾ・キッズなどの言葉がみられる。このように現代社会における青年は、長いモラトリアムのなかでふわふわと漂流の状態にあるようである。

ところでこのような青年を検討する場合、E・H・エリクソンのアイデンティティの概念がよくもちいられる。しかしこの概念は現代社会における青年を検討する場合、いくつかの問題がある。

その第一は、アイデンティティという概念の多義的な使用である。エリクソンは青年を心理＝歴史的に研究するにあたり、アイデンティティを個人の心理的発達、職業との関係、集団との関係、そして歴史との関係など多様な側面から論じている。したがってこのように多義的に使用されるアイデンティティ概念を、いくつかの次元に整理する必要がある。

またその第二は、アイデンティティ拡散（Identity Diffusion）の問題である。エリクソンは人間の漸成的な（epigenetic）発達を主張し、青年期の課題としてアイデンティティ対アイデンティティ拡散を示し、基本的徳目として忠誠をあけている。しかし前述した論文に示されるように青年は、忠誠の対象が見つからず長いモラトリアムの状態にある。そして青年のこのような状態は小北木啓吾が示すように“正常な”現代青年の心理となっており、これら全てをエリクソンが病理例として示したアイデンティティ拡散とするのは

無理があるように思われる。したがって現代社会における青年を検討するには、アイデンティティ拡散についても整理する必要がある。

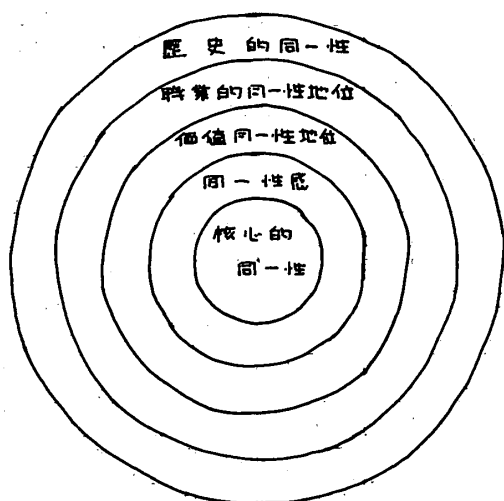
I エリクソンへの批判

それではアイデンティティ論の問題の第一について、まず教育心理学の分野からみてみよう。E・ジェイコブソンはエリクソンの社会学的な方向性、青年期の重視を批判し、個体発生的要因への着目を指摘している。また同じような視点からM・S・マラーは乳幼児期の心理的誕生を考察し、母親から分離し別個の個体となる分離－個体化過程における核心的同一性（Core Identity）の形成を示している。このような批判は社会的要因から心理的要因、青年期から乳幼児期へ視点をうつし、アイデンティティの文字どおり核心的次元を設定した、ということができる。

そして中西信男は、他のアイデンティティにかんする議論も整理し、図Iのような同一性の次元を示している。このようにアイデンティティは乳幼児期に形成される核心的同一性とそれにともなう同一性感、価値観と関係する価値同一性地位と職業と関係する職業的同一性地位、そして歴史と関係する歴史的同一性という次元に分けることができる。

またアイデンティティ論の問題の第二について、O・カンバークは青年の境界創設者が自己表象と対象表象を結合する十分に強い自我の核の形成を失敗していることを指摘している。また佐方哲彦は自我心理学のなかでアイデンティティ拡散が、核心的同一性の拡散

図I 同一性の次元



の意味でより限定的にもちいられていることを指摘している。

このように病理としてのアイデンティティ拡散は図Iに示された核心的同一性の拡散がまず問題とされるべきであり、他の次元についてはより一般的な社会現象として検討されるべきである。

したがって次に、同一性地位、歴史的同一性について検討することにしよう。

II 同一性地位の問題

まず価値同一性地位について、現代社会における青年には価値観の変化の傾向が存在する。たとえば「国民生活に関する世論調査」において、物質的な豊かさよりも（72年・43.3% → 78年・42.9% → 84年・39.2%）、心の豊かさ・ゆとりを望む（72年・37.5% → 78年・38.8% → 84年・46.7%）という傾向が示されている。またこのような傾向は他の先進諸国にもみられ、R・インクルハートはヨーロッパの11ヶ国を調査し、そこに脱物質主義的価値観への移行という「静かなる革命」が存在していることを示している。

また村上泰亮はこのような価値観の変化を

無限遠の目標にたいし手段的価値を追求しつつ外的世界の支配をめざす手段的能動主義（instrumental activism）が、豊かな社会の出現により行動それ自体に価値をおくコンサマトリー（consumatory）な価値へ移行する、としている。

次に職業的同一性地位についても、職業観の変化の傾向が存在する。たとえば「世界青年意識調査」において、仕事以外の生活に生きがいを感じる傾向がみられる。（77年・48.5% → 83年・52.7%）またこのような傾向は学習観についてもみられ、「青少年の連帯感などに関する調査」において生きがいについて、勉強が減少し、スポーツ・趣味、友人や仲間が増加する、という傾向が示されている。

このように現代社会における青年は価値観のコンサマトリー化にともない、職業や学習にアイデンティティをもとめる傾向が弱体化しているようである。

III 歴史的同一性の問題

それでは最後に歴史的同一性について検討してみよう。一般に青年のモラトリアム状態について、豊かな社会における社会問題として批判的に論じられることが多い。しかしK・リニストンは、社会のテクノロジカルな自我の要請にたいし、青年がそれを拒否し、離反した青年（Alienated Youth）としてあらわれる点を指摘している。このように青年のアイデンティティは社会の管理社会化における学校や企業の場合での疎外、という点からのアプローチも重要である。そしてそのとき、仲間集団や地域によって形成される集団的アイデンティティや、流動性というアイデンティティ自身の性質の変化が改めて問題になってくるだろう。